

---

# ふたりだけのクリスマス

しろつき

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ふたりだけのクリスマス

### 【Nコード】

N2434T

### 【作者名】

しろつき

### 【あらすじ】

クリスマス当日、胸の中に複雑な想いを抱える妹と兄。その二人がクリスマスの奇跡に乗せて伝え合う。ずっと大切にしてきた、ところを。

## くふたりだけのクリスマス〜1

「ねえ起きてよ」

「あと少し……」

「こら、起きろっ！」

「いてっ」

体が一回転する感覚と続けて襲ってきたわき腹の痛みに、俺は眠りから無理やりに覚醒させられた。

しかし目だけは、まぶた目蓋が重くて開けられない。

まあ姿が見えなくても、こんなことをするのは誰かくらい見当は付くからいいんだが。

「なあ、みなと。休みくらいは寝かせてくれよ……」

ああ。

目の前で大きなため息をつく音がしたよ。

これは嫌な予感がする。

「私はお母さんに……起こすよう頼まれただけよ！」

耳元で大きな声を叫ばれた。

「わかった、分かったもう起きた」

耳なりがして頭が痛いけど、これ以上寝ていたら今以上にひどいことをされかねない。

俺は目に力を入れ、ぱつちりと大きく見開いた。

しじまがひび縞柄だ。

目の前にはそんな光景があった。

縞柄なんてみたのはいつ以来だろうか、子供っぽいな。

なんてくだらないことを、俺は考えてしまった。

「…………妹のパンツじつと見てる暇あるなら、早く起きてよね」

「じつ」

冷やかな目で俺を見下ろしながらそう言い捨てると、妹は乱暴にドアを閉めて俺の部屋から出て行った。

今日の始まりは、とても嫌な始まり方だ。

ふたりだけのクリスマス〜2 (前書き)

続きです。

## くふたりだけのクリスマス〜2

俺は眠りまなこを擦りつつも、妹の湊みなとに言われた通り起きると一階に降りていった。

朝から家が静かだなと思えば、テーブルの上に？買い物にいくからお昼は冷蔵庫のを湊みなとと晃あきらの二人で食べてね？なんていう紙が置いてある。

なるほど、そういうことだったのか。

お腹すいたなあ。

冷蔵庫の中に入っているお昼を想像するとお腹がくうとなった。

「あー、やっと降りてきた」

待ち遠しかったというようにリビングの壁に寄りかかって、湊が待っていた。

服装を見るに出かけるらしい。

「今日は友達と約束があるの。帰り遅くなるってお母さんに伝えておいてね」

「クリスマスなのか？」

俺の言葉に湊がむっと頬を膨らませたかと思うと

「クリスマスだからに決まってるでしょ。馬鹿アキラっ！」

ドアを壊れんばかりの勢いで閉め、家から出て行った。

家のドアは、もうちょっと丁寧に閉めて欲しいものだ。

「はあ、妹のくせに可愛くない……」

俺は椅子に深く腰を掛けると、部屋の壁に掛けてあったカレンダーに目をやる。

今日は、十二月二十四日木曜日。

こどもであれば誰だって嬉しくなってしまう特別な一日。

一年間のいちばん最後にあって、いちばん楽しみなクリスマス・イブだ。

まあ我が家はというと、違うのだが。

赤い衣装に白いひげのおじいさんがプレゼントを持って来てくれる。

そう信じていたちいさい頃の湊は、今より素直で可愛かったな。なのにいつから小生意気になってしまったんだ。いや、変わってしまった原因は俺に有るんだろうな。

ふたりだけのクリスマス〜3 (前書き)

続きです



くふたりだけのクリスマス〜3

目を閉じれば、湊とふたりで遊んだ記憶がありありと浮かんだ。  
ふたりで楽しみにしていた、クリスマスイブ。

泣いていた。

楽しいはずなのに、目を真っ赤にさせて泣いていた？

……だよ。

……ちゃんが。

泣きじゃくる湊の声、精一杯に笑う自分、次の日からぎこちなくなつた俺たち　なんでだろう。

肝心な部分が抜けている。

？あの花、きれいだね。とってこれないかな？

目を輝かせて笑った、ちいさい妹。

可愛いわがまを言う、さくら色をした唇。

すこし生意気そうな目じり。

？ほら、これ取ってきたんだよ？

子供の無謀な自信で、怪我をしてとつてきたバラの花。

？ひ……ひぐつあ……お兄ちゃんがケガしてまで、欲しくな  
かったよ？

そんな俺の前で泣く湊。

ああ。そうか。

思い出すと、忘れていたことが悔やまれるほどの切ない気持ち。  
けれども忘れていたがゆえに昔よりも強くなった気持ちだが、胸の  
奥を締め付ける。

あの日。

俺が自分勝手な行動で泣かせてしまったのか。

ふたりだけのクリスマス〜4（前書き）

続きです。

## くふたりだけのクリスマス〜4

と、突然ガタガタツと大きな音が鳴った。

「うおっ」

机の上で携帯が、着信を知らせるランプを点滅させ震えている。あれ、俺は寝てたのか。

携帯を開き掛けて着た相手を確認すると電話に出る。

「えつと、みな……」

「アキラ今どこにいるの」

「家、だけど」

変な質問だな。

俺がどこにも用がないのくらい、知ってるだろう。

「桜ヶ丘の駅前にいるから。迎えに来て、お願い」

それだけを伝えたと、一方的に俺は電話を切られてしまった。

一体、どういうことだろうか。

はあ。

良く分からないがしょうがない、行ってやろう。

家を出てから電車に乗って移動すること一時間あまり、湊に言われた場所の桜ヶ丘駅に着いたのは、日も沈み始めたころだった。

駅前には電飾で彩られた大きなクリスマスツリーが一本、今日という日を演出していた。

近くでは待ち合わせをしている人や、カラフルに光る光景を眺めてたりする人たちが集まっている。

居るとしたらこの中じゃないだろうかと思ひ辺りを見回してみる

が、湊は見当たらない。

駅前には座るような所はないし、近くにいるはずなんだが。

ふたりだけのクリスマス〜5 (前書き)

続きです。

## くふたりだけのクリスマス〜5

電話の内容も良く分からなかったし、何かあったのか。

急激な早さで暗くなっていく街に点滅するツリーのライト、息を白く染める寒さに、俺の中の不安は大きくなるばかりだった。

行き交う人の流れから少し離れ、あたりをぐるりと見回してみる。駅前にあるショップの前に休んでいる人がまばらにいたが、その中にも湊はいない。

「あつ」

やっと見つけた。

人だかりの出来ているクリスマスツリーからは離れた少し暗いところで、寒そうに座り込んでいる。

まったく、心配させやがって。

そうだ。

心配させた罰として、気付かないように近づいて驚かせてやろう。

「やっと見つけた、何やってんだ」

湊は、びくうっと俺の声に反応するように肩を震わせた。

しかしこちらを向こうとはしない。

「遅い」

返事の変わりに返ってきたのは文句の連続だった。

「……………寒かった」

「え？」

「お腹すいた。足痛いし、どつかで休みたい……………」

湊がいつもの通り、滅茶苦茶な我がままを言う。

言うことは生意気だったけれど、声が震えている。

なんとなくだが、その理由は聞いちゃいけないような気がした。

「何言ってるんだほら、家に帰るぞ」

湊の方を見ないよう俺は顔を横に向けたまま、ちいさくて冷たくなつた手をぎゅっと握り締めて引っ張り起こした。



ふたりだけのクリスマス〜6 (前書き)

続きです。

## くふたりだけのクリスマスく6

湊の手ってちいさいんだな、それにすべすべしてる。

手を握ってから少しずつ、俺はいろいろな発見をした。

そして今の俺たちは、周りの目にどんな風に映っているんだろう。

年はあまり離れていないから、恋人………なんかに見えて  
いるんだろうか。

いろいろな考えが頭を巡る。

湊が後ろで立ったのを確認すると俺は歩き出そうとした。

が、後ろを向くとうつつむいたままで、湊は動こうとしない。

「家帰るまで、もたないよ」

ゆっくり、湊が俺の顔を見上げた。

いつもなら気の強そうな目を真っ赤にさせて。

あまりの衝撃で俺は息を吸い込んだきり、吐くのを忘れてしまっ  
た。

こんなにも湊は脆くて、触れてしまえば壊れそうな存在だったの  
か。

そうじゃなくて、何か言わないと。

でも考えがまとまらなくて、自分から言つべきことがなかなか言  
えない。

「そうだな、休むならファミレス？」

「やだ」

即答かよ。

こここの近くにはデパートやらショップはあるけれど、休めるよう

な所はレストランを除いたらほとんど無かったはずなんだが。

「カラオケか」

「部屋せまいの嫌いだし、うるさい」

部屋が狭いって、お前カラオケ好きで良く行ってただろう。

家に帰りたくないなんて無茶苦茶な我がまま、どうしろっていうんだよ。

ふたりだけのクリスマス〜7 (前書き)

続きです。

くふたりだけのクリスマス〜7

「なら、どこがいいんだ」

「言えばそこに行くの？」

「行ってやるさ」

俺の思いつく限りの場所では、湊が嫌としか言わない。そうなるとう湊に行き先をまかせる以外、手はないだろう。

「ふふ。言ったね」

「何だ？」

何か湊がつぶやいた気がしたのだが、あまり聞き取れなかった。

「………あそこがいい」

「あつちに店はないだろう」

「横になりたいから、ホテルがいい。あるでしょ？」

頭に大きな衝撃がきた。また息が止まりかけた。

どこでも良いようなことは言ったが、場所的にまずい。

別に、変なことなんて少しも考えてないんだが。

「本当にか」

「本当だよ」

冷たい夜風が吹いて、湊の肩まで伸びた髪をかるく揺らす。

顔の距離がすごく近かった。

結局、俺が折れて、湊の希望通りにした。

建物の前まで来て、部屋に入るまでが一番緊張する時間だったがひたすらに無表情にしてやり過ごすことが出来た。

湊は部屋へ入るなり相当に疲れていたのか、バッグを適当に投げ

てふらふらとベッドに倒れこんだ。

それを見て、俺はとりあえず飲み物があつたほうが良いかと思ひ、冷蔵庫の中から水を持ってきた。

「靴くらいちゃんと脱げよな」

聞こえていないのか、それとも無視をしているだけなのか、湊は答えない。

ふたりだけのクリスマス〜8 (前書き)

続きです。

くふたりだけのクリスマス〜8

「んうっ……」

ごろりと湊がベッドの上を転がった。

上から見ると、湊のスカートは捲り上げられ下着が見えている。

見たことの無い姿で衝撃的だった。

薄っぺらい耳や細い首筋、弱々しく放り出された白い手足は、視線を釘付けにするには十分すぎる。

「うわぁ」

直してくれないか。目のやり場にすごく困る。

「最悪」

ベッドの上から呆れるような目で見られた。

「や、違うんだ。別に何も……」

「無理して外になんて出なきゃ良かった」

湊は珍しく、消えそうな細い声を出すとゆっくりベッドから起き上がる。

やや疲れたような顔をしていた。

「街の中は恋人ばかりで幸せそうで、寂しくなっちゃった」

無理して笑っているような顔は、見ているだけで胸を締め付けてきた。

「だけどね、アキラに無理なお願いして来てもらって、アキラの顔を見たらすごく安心したの」

そのまま湊は言葉を続ける。

「ねえ、これ覚えてる？」

そう言って湊がポケットから取り出したのは、色あせてしまい茶色く変色したバラの花のしおり。



不恰好すぎるそれは、俺の中にあつた古い記憶を呼び起こす。

「昔に取つたバラの花、だろ。それで俺はみなとを泣かせてた」

「そうだね」

「笑つてほしかったのに」

「知つてたよ。でも危ないことをして欲しくなかつたから、わたしは距離を置いた」

言葉が、見つからなかつた。

耳は湊の声以外を聞きこつとしないうえ、目は湊の顔を見たまま動かさない。

ふたりだけのクリスマス〜9 (前書き)

続きです。

## くふたりだけのクリスマス〜9

「だけどね、やっぱりわたし我慢できないよ。アキラのこと今でも好き」

床から俺の顔へと視線が移ってきた。

湊は目のはしに、大きな涙を浮かべている。

立ち上がり、二歩だけ、俺に近づいた。

手を伸ばせば腕の中に納まる距離で、見上げるように。

「兄妹だけど……俺だって湊のことをそう思ってる」

何度も喉まで出掛かつては詰まっていた言葉が、やっと言えた。急に顔が熱くなった気がした。

「じゃなきや、無茶苦茶なお前の我がまま聞いていられるか」

「お兄ちゃん……」

「その呼び方、久しぶりで照れるな」

もうずっと、湊にお兄ちゃんなんて呼ばれたことが無かったな。だからなのか、今更そう言われるとすごく恥ずかしい。

「お兄ちゃんって呼ぶのダメ？」

眉をさげ、湊は困りながらすねる顔をする。

「いい……けど」

唇が、すごく近くにあるのに気がついて俺はうろたえてしまった。わざと狙っているんじゃないだろうか。

「じゃあお兄ちゃん。こう呼ぶとイケナイ関係みたいでいいね」

いつもなら目じりのきつい目も、今はすごくかわいらしい。

「みたい……じゃないけどな」

細い湊の指が、すっと俺の手に伸びてきた。

俺は早く触れたいのを我慢して、恐る恐る湊の指に触った。  
だって、俺の手が震えてるなんて分かったら恥ずかしいだろう。

ふたりだけのクリスマス〜10（前書き）

続きです。

くふたりだけのクリスマス〜10

冷たい指が俺の指をゆっくり開き、そっと絡めてくる。  
空いたもう一方の手にも、湊は手を重ねてきた。  
湊がそうすると、俺は同じくらいにやさしく握り返した。

ここまで来たら、恥ずかしいコトなんてない気がした。

「わたしこれ好きかも」

俺は胸がときどきしてこのときどきまでも、手の繋がりに伝わってしまいそうだった。

「ねえ、好きだってことちゃんと教えて？」

「ああ……」

湊は頬を赤らめ、睫毛を伏せる。

湊の手、大きな目、やわらかそうな唇。

俺はただ、湊の唇へ吸い込まれるようにして近づき、そっと重ねる。

兄妹とか現実とかそういうものは、甘いこの空気の前に意味は無かった。

「お兄ちゃん、すごい顔してる」

「お前だってだろう」

「ばれた」

「ばれるって」

こんなにも、こころが溶け合っている時間は初めてだった。  
妹の湊が今までにないほど愛おしい。

ふたりだけのクリスマス〜11(終)(前書き)

続きです。

くふたりだけのクリスマス〜11（終）

「泊まって……みない？」

「そうしてみるか」

「やった」

母さんには、そうだな。

友達の家泊まったと言っておこうか。

いや、いまは考えるのをやめよう。

目覚めたあとの時間なんていらぬ、夢のようなこの時間にもっと浸っていたいから。

「もう少し、こうしていてもいい？」

湊は手を繋げたまま、頭をそっと俺の胸にあずける。

湊の髪はシャンプーのいい匂いがして、上下する胸の呼吸が伝わってきた。

あつたかい。

少しだけ、俺は湊の髪に顔をうずめてみた。

湊も甘えてきた。

このまま夜が終わるまで、ふたりだけのクリスマスが終わるまで、ギリギリまでずっと甘くあたたかい気持ちが続けばいいな。

何よりも強く純粋に、俺はクリスマスの奇跡にそう願った。

翌朝、湊は昨日のことが嘘みたいにつんとした態度を取っていた。昨日から変わったことといえば、ほんのちよっぴりだけど、角が取れたくらい。



あとは、そう。

人前でなければ俺は湊のお兄ちゃんでありながら、

大好きな人になれたことだろうか。

ふたりだけのクリスマス 11 (終) (後書き)

これでこの物語は終わりとなります。

機会がありましたら、また次のお話であいましょう。  
それでは。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2434t/>

---

ふたりだけのクリスマス

2011年8月11日21時50分発行